

## Propertius, 3.7.7-18

平野智晴

nam, dum te sequitur, primo miser excidit aeuo,  
et noua longinquis piscibus esca natat;  
et mater non iusta piaē dare debita terrae  
nec pote cognatos inter humare rogos; 10  
sed tua nunc uolucres astant super ossa marinae,  
nunc tibi pro tumulo Carpathium omne mare est.  
 infelix Aqulio, raptae timor Orithyiae,  
 quae spolia ex illo tanta fuere tibi?  
 aut quidnam fracta gaudes, Neptune, carina? 15  
 portabat sanctos alueus ille uiros.  
 Paete, quid aetatem numeras? quid cara natanti  
 mater tibi in ore est? non habet unda deos.

(Prop. 3.7.7-18)

本論は、構成上の問題が多数指摘され様々な修正案が提案されている Propertius, 3.7 において、7-18 に対して新たな類例を提示し、これが属する文学的伝統について再考し、当該詩行の連続性について論ずるものである\*1。

本詩テキストの錯綜とした問題について、Butler & Barber は、簡潔に、以下の三点に整理している。すなわち：(1) 1-8 において tu と te は pecunia を参照しているのに対し、11 における tua は、導入的な呼格なしにパエトウスに帰せられる；(2) 25 reddite において、誰に呼びかけているのか不明である；(3) 17-20 において、詩人が Paete, quid aetatem numeras? ... と叫ぶのは奇妙であり、むしろ 57-64 におけるパエトウスの実際の台詞との関わりが示唆される\*2。これらを根拠に、本詩の前半部については、おおよそ、1-10：パエトウスの難破による死への言及、51-66：パエトウスが死に際に残した台詞を含んだ具体的な描写、17-18：死にゆくパエトウスに対する詩人のペルソーナの呼びかけ、11-16：埋葬されることのないパエトウスの亡骸<sup>なきがら</sup>の描写、という叙述の流れになるよう、詩行の入れ替えが提案されている\*3。

\*1 テキストは、Heyworth が自身の校訂本の巻末に補遺として採録した N 写本に拠る (Heyworth, *Elegos* 193-195)。ただし、本論引用テキスト中の下線は筆者に拠り、これについては、vid. p. 75.

\*2 Butler & Barber 275-276.

\*3 Heyworth は、このような立場を押し進め (Heyworth, *Cynthia* 309-312)、極限まで手を入れた詩行の入れ替え案を提示している (id., *Elegos* 111-114)。

これに対して、Orlebeke は、上記 (1) に対して詩行の入れ替えという修正手段を採ったことが際限のない詩行の入れ替えの連鎖を引き起こすきっかけとなったとし\*4、寧ろ、第 8 行と第 9 行の間に 1-2 カプレットの脱落 lacuna を想定すべきである、と主張した。まず、彼女は、従来指摘されてきた Prop. 3.7 と A.P. 7 の関連性を改めて論じ、前者 5-12 に対して、後者 652.1-4, 273, 652.5-8, 285, 288 を比較し、9-12 の詩行の入れ替えはプロペルティウスによるこうしたエピグラムの主題の繋がりを不必要に乱すとした\*5。そして、Fedeli, Barber, Camps, Richardson らの句読法から 'pecunia' への呼びかけは 1-8 で完結していること、9-10 の主語 mater と 11-12 の主語 uolucres の間に認められる平行性から 9-12 全体がパエトウスを指し示していることを示し\*6、さらに、それでもパエトウスの呼格が必要であることを論じた\*7 上で A.P. 7.286 を引用し、およそ「パエトウスよ、……吹き荒れる嵐が到来したとき、贅沢な生活はお前を助けはしなかった。お前の富への希望は失われ……」という内容の詩行が脱落したものと推測した\*8。

際限のない詩行の入れ替えに走るのではなく第 8 行と第 9 行の間における lacuna の想定に止めよ、という主張には一定の説得力がある\*9 が、しかし、それでも、彼女の議論には、いくつかの点で曖昧さが残るように思われる。本論では、A.P. 7.652.5-8 との比較に着目して、二点だけ考えてみたい。

第一は、Prop. 3.7.9-10 et mater non iusta pia e dare debita terrae | nec pote cognatos inter humare rogos に対して A.P. 7.652.7-8 Τιμάρης δὲ κενὸν τέκνου κεκλαυμένον ἀθρῶν | τύμβον δακρύει παῖδα Τελευταγόρην が比較されるとき、前者で言及されているのは息子を弔うことができない母親であるのに対し、後者で言及されているのは息子を弔うことのできない父親であることである\*10。Orlebeke はどちらも「子を失った親」と総称している\*11 が、後述するように、言及する対象が父親と母親では、語り手のニュアンスがいささか変わってくる。

第二は、9-12 et mater non ... | nec pote ... | sed tua nunc uolucres astant super ossa marinae, | nunc tibi pro tumulo Carpathium omne mare est に対して 7.652.5-8 χὰ μὲν που καύηξιν ἢ ἰχθυόβόρους λαρίδεσσιν | τεθρήνητ' ἄπνους εὐρεῖ ἐν αἰγιαλῶ, | Τιμάρης δὲ ... | ... が比較される

\*4 Orlebeke 424-425.

\*5 id. 421.

\*6 id. 422.

\*7 id. 423.

\*8 id. 426-428.

\*9 これについては、vid. pp. 77-78.

\*10 Orlebeke 419.

\*11 ibid.

とき、その叙述の流れは、前者では、亡骸を「(母) 親は弔うことができない」代わりに「海鳥が<sup>たか</sup>集まっているであろう」、となっているのに対し、後者では、亡骸には「海鳥が集まっている」が「(父) 親は弔うことができない」、となっていることである\*12。この順序の転倒の理由として、彼女は、パエトウスの亡骸の残酷な運命に力点が置かれているからである、と説明するが、これは十分に説得的とはいえない\*13。

A.P.7 との明らかな関連性にも関わらずこのような曖昧さがなお見られる、ということは、これらのエピグラムが組み合わせられ引用されるにあたって、その背景に別の要因があることを意味しており、それは、A.P.7 とは異なる類例が、何かさらに踏まえられていることに拠るのかも知れない。

そもそも、遠方で悲惨な死を遂げた若者を描写するにあたり、弔うことができない血縁として（「父親」や「両親」ではなく）「母親」のみが挙げられるとき、これを一人取り上げることによって、この若者の死の悲劇性が最大限に強調される、という効果が期待されるものらしい。

例えば、Hom. *Il.* において\*14、中盤を過ぎた辺りから、「お前は近親者に嘆かれることなく、(その亡骸は) 山犬や猛禽に引き裂かれるであろう」という定型句が、繰り返し現れるようになる\*15。最初のうちは、主たる武将が敵兵に向かって罵倒するにせよ味方に向かって警告するにせよ「両親」が挙げられるが、終盤に近付き表現が激しさを増すにつれて、これが削ぎ落とされて「母親」のみになってゆく。こうした罵倒のうち最も強調された形が、瀕死のヘクトールに投げかけられるアキッレウスの一言であることは、論を俟たないであろう：22.349–354 οὐδ' εἴ κεν δεκάκις τε καὶ εἰκοσὴν ἤριτ' ἄποια | στήσωσ' ἐνθάδ' ἄγοντες, ὑπόσχωνται δὲ καὶ ἄλλα, | οὐδ' εἴ κέν σ' αὐτὸν χρυσῶ ἐρύσασθαι ἀνώγοι | Δαρδανίδης Πρίαμος· οὐδ' ὥς σέ γε πότνια μήτηρ | ἐνθεμένη λεχέεσσι γοήσεται, ὃν τέκεν αὐτή, | ἀλλὰ

\*12 *ibid.*

\*13 Heyworth は I カプレット分の lacuna の後に II-12, 9-10 と詩行の入れ替えを行っている (Heyworth, *Elegos* 114) が、その際、lacuna も含めたこの箇所と A.P.7.652 を比較し、間接的にこの処置の根拠としている (Heyworth & Morwood 170-171 ad vv. II-12, 9-10)。

\*14 本詩 Prop. 3.7 には、文脈がはつきりしないものの、トロイア圏の武将への言及が一度ならず見られる。cf. 21-24 (アガメムノン) ; 39-46 (オデュッセウス)。

\*15 この定型については、cf. Hom. *Il.* II.452-455 (オデュッセウスがトロイアの武将ソーコスに向かって罵倒して、父母に言及して) ; 15.349-351 (ヘクトールがトロイア勢に向かって警告して、親戚の男女に言及して) ; 21.122-127 (アキッレウスがトロイアの武将リュカーオンに向かって罵倒して、母親に言及して) ; 22.86-89 (ヘカベーがヘクトールに向かって懇願して、自身と嫁アンドロマケーに言及して) ; 22.352-354 (アキッレウスがヘクトールに向かって罵倒して、母親に言及して) ; *Od.* 24.290-296 (ラエルテースが(我が子と知らず) オデュッセウスに向かって悲嘆して、自身と妻そして嫁アンドロマケーに言及して)。

κύνες τε καὶ οἰωνοὶ κατὰ πάντα δάσσονται.\*16

それゆえ、Prop. 3.7 においても、プロペルティウスは、「亡骸を喰い貪る魚」と「弔うことのできぬ母親」を対比させることで、パエトゥスの死の悲劇性\*17 を可能な限り強調しようとしている、とも考えられるのである。この、「魚」と「母」の組み合わせは、Hom. *Il.* においては、アキッレウスのリュカーオーンの亡骸に対する罵倒の言葉に見られるが、Hom. を熟知していた読者であれば、プロペルティウスの詩句を目にしたとき、ヘクトールに対する罵倒に次いで印象深い当該詩行を容易に想起し得たかも知れない：

ἐνταυθοῖ νῦν κείσο μετ' ἰχθύσιν, οἳ σ' ὠτειλήν  
αἶμ' ἀπολιχμήσονται ἀκηδέες· οὐδέ σε μήτηρ  
ἐνθιμένη λεχέεσσι γοήσεται, ἀλλὰ Σκάμανδρος  
οἴσει διηΐεις εἴσω ἀλὸς εὐρέα κόλπον. 125

θρῶσκων τις κατὰ κῦμα μέλαιναν φρίχ' ὑπαίξει  
ἰχθύς, ὅς κε φάγησι Λυκάονος ἀργέτα δημόν.  
φθείρεσθ', εἰς ὃ κεν ἄστν κιχείομεν Ἴλιου ἱρήσ,  
ὑμεῖς μὲν φεύγοντες, ἐγὼ δ' ὄπιθεν κεραίζων.  
οὐδ' ὑμῖν ποταμός περ εὐρροος ἀργυροδίνης 130  
ἀρκέσει, ᾧ δὴ δηθὰ πολέας ἱερεύετε ταύρους,  
ζωοὺς δ' ἐν δίνῃσι καθίετε μώνυχας ἵππους.  
ἀλλὰ καὶ ὡς ὀλέεσθε κακὸν μόρον, εἰς ὃ κε πάντες  
τείσετε Πατρόκλοιο φόνον καὶ λοιγὸν Ἀχαιῶν,  
οὗς ἐπὶ νηυσὶ θοῆσιν ἐπέφνετε νόσφιν ἐμεῖο. 135

(Hom. *Il.* 21.122-135)

上記引用における下線部は、本論冒頭に引用した Prop. 3.7.7-18 における下線部と共に、類似性が認められる部分である。

Prop. 3.7.7-18 と Hom. *Il.* 21.122-135 を比較したとき、以下のような類似性が見られる。すなわち、前者においては、およそ「彼（パエトゥス）は魚の餌となるのだ（7-8）。そして、母親は弔うことができないのだ（9-10）、そうではなく、お前の亡骸の上を海鳥が集って、全カルパティア海がお前の墓となるのだ（11-12）」と叙述が進んで行くのに対し、後者においては、およそ「お前は魚の餌となるであろう（122-123）、お前を母親は弔うことができないだろう（123-124）、そうではなく、スカマンドロス河が海へ運び去り（124-125）、リュカーオーンを魚が喰らうであろう（126-127）」と叙述が進んで行く。既に論じたように、両者には、若者の亡骸を喰らう動物と若者を弔うことのできぬ母親の対比が見られ、しかも、前者においては、「魚（が喰らう）-母親（は弔えない）-そう

\*16 テキストは、Monro & Allen に拠る。

\*17 cf. Prop. 3.7.17-18, 57-64.

ではなく、海鳥（が集って、カルパティア海が墓となる）」と、後者においては、「魚（が喰らう）－母親（は弔えない）－そうではなく（、スカマン드로ス河が海へ運び去って）、魚（が喰らう）」と、動物と肉親の現れ方や詩行の構文、そして両者の関係性が類似している\*18。

また、この比較から、「海は神々を持たない（18）」の解釈についても、ひとつの可能性を考えることができる。すなわち、Prop. 3.7 においては、18 non habet unda deos という、語り手による非情な呼びかけに対して、*Il.* 21 においては、130-131 οὐδ' ὑμῶν ποταμός περ ἐύρροος ἀργυροδίνης | ἀρκέσει... という、アキッレウスによる非情な呼びかけが見られるのであるが、前者を「海にはお前の助けになるような神々などいない」といったほどの意味に理解することができるならば、両者の呼びかけもまた類似しているということができるのである。このことは、両者の類似性が、前者においては 7-12 から少し離れた 18 にまで、後者においては 122-127 から少し離れた 130-131 にまで及んでいる、ということを示しており、前者における 7-18 はおよそ一つのまとまりを成している、ということを示しているように思われる。

ところで、詩人のペルソーナが、パエトウスを描くにあたりリュカーオンを踏まえたのは、彼もまた溺れかけていた\*19 というだけでなく、以前アキッレウスに捕えられ捕虜としてレームノス島へ売り払われた、という経緯もあつたからだと思われる。

リュカーオンは、アキッレウスに対して、次のように嘆願する：78-85 καί με πέρασσας ἄνευθεν ἄγων πατρός τε φίλων τε | Λῆμνον ἐς ἠγαθήην, ἐκατόμβιον δέ τοι ἦλφον. | νῦν δὲ λύμην τρίς τόσσα πορών· ἤως δέ μοί ἐστιν | ἦδε δυωδεκάτη, ὅτ' ἐς Ἴλιον εἰλήλουθα | πολλὰ παθών... | ... | ... μινυθάδιον δέ με μήτηρ | γένεατο Λαοθόη, ... すなわち、彼は、自らの命が金で購われ海を跨いで放浪を強いられたことを訴え、故郷に帰ってからの短い日数を数えて見せ、息子を若くして亡くすことになる母親のことを持ち出して命乞いをするのであるが、これに対して、アキッレウスは、次のような非情な言葉を返す：

\*18 後者において、河畔で行われた戦いであつたから亡骸を喰らう動物として魚が登場しているが（cf. *Il.* 21.203-204）、基本的に、この定型において、亡骸を喰らう動物は野犬や猛禽である（cf. 22.354）。ゆえに、前者において、（魚の代わりに）海鳥が出てくるとしても、これは、後者との類似性を損なうものではない。無論、私は、Orlebeke が論ずるように、この海鳥が *A.P.* 7.652.5-6 を踏まえてのものである、ということも否定しない（cf. Orlebeke 419）。

\*19 リュカーオンは、アキッレウスに追われて河に逃げ込んだトロイア兵の一人であつた、と思われる。アキッレウスが見かけたとき、リュカーオンは兜も盾も身に付けず槍も打ち捨て河から上がっており、戦闘態勢になく戦闘意欲も喪失した状況にあつたことから、恐らく、溺れかけていたのであろう。cf. *Il.* 21.49-52。

ἤπιε, μή μοι ἄποινα πιφαύσκεο μηδ' ἀγόρευε·  
 πρὶν μὲν γὰρ Πάτροκλον ἐπισπεῖν αἴσιμον ἦμαρ, 100  
 τόφρα τί μοι πεφιδέσθαι ἐνὶ φρεσὶ φίλτερον ἦεν  
 Τρώων, καὶ πολλοὺς ζωοὺς ἔλον ἠδὲ πέρασσα·  
 νῦν δ' οὐκ ἔσθ' ὅς τις θάνατον φύγη, ὃν κε θεός γε  
 Ἴλίον προπάρουθεν ἐμῆς ἐν χερσὶ βάλῃσι,  
 καὶ πάντων Τρώων, πέρι δ' αὖ Πριάμοιό γε παίδων. 105  
 ἀλλά, φίλος, θάνε καὶ σύ· τίη ὀλοφύρεαι οὕτως;  
 κάτθανε καὶ Πάτροκλος, ὃ περ σέο πολλὸν ἀμείνων.  
 οὐχ ὄραας οἶος καὶ ἐγὼ καλός τε μέγας τε;  
 πατρὸς δ' εἴμ' ἀγαθοῖο, θεὰ δέ με γείνατο μήτηρ·  
 ἀλλ' ἔπι τοι καὶ ἐμοὶ θάνατος καὶ μοῖρα κραταιή· 110  
 ἔσσειται ἢ ἡὼς ἢ δεΐλη ἢ μέσον ἦμαρ,  
 ὀππότε τις καὶ ἐμεῖο Ἄρη ἐκ θυμὸν ἔληται,  
 ἢ ὃ γε δουρὶ βαλὼν ἢ ἀπὸ νευρήφιν οἰστώ.

(99–113)

これらは、13–18 infelix Aquilio, raptae timor Orithyiae, | quae spolia ex illo tanta fuere tibi? |  
 ... | Pacte, quid aetatem numeras? quid cara natanti | mater tibi in ore est? において、その反映  
 が認められる。すなわち、金では買えない命を奪われようとするパエトウスもまた、嵐と  
 海の神に嘆願するにあたり、自らのまだ若い年齢を数えて、母親に言及するのであるが、  
 詩人のペルソーナは、こうしたことを非情にも問いかけてみせることによって、むしろ嵐  
 と海の神の非情を話<sup>か</sup>っているのである。

アキッレウスは、リュカーオーンの嘆願によって、以前は捕虜として捕えて金儲けにし  
 たトロイア人ではあったが、パトロクロスが死んだ今もう誰も生かしてはおかぬ、という  
 姿勢を鮮明にする。詩人のペルソーナは、パエトウスの嘆願によって、以前は何回かの質  
 易によって多少の金儲けをしたかもしれないが、嵐と海の非情によって遂にその生を終え  
 なくてはならぬ、という事実を鮮明にする。一度は金で贖い海を渡った命を結局は落とす  
 ことになるリュカーオーンと、金を追い求め海を渡っている内に命を落とすことになるパ  
 エトウス。二人には、いわば金と命が天秤に掛けられながらも、結局は金では買えない命  
 を落とすことが避けられなかった、という点においても類似性があるのであり、こうし  
 たことが 128–129 φθείρεσθ', εἰς ὃ κεν ἄστυ κιχείομεν Ἴλίου ἱρής, | ὑμεῖς μὲν φεύγοντες, ἐγὼ  
 δ' ὄπιθεν κεραῖζω を 13–18 infelix Aquilio, ... というかたちに敷衍させ、18 non habet unda  
 deos へと続く文脈を構成していると考えられるのである\*20。

\*20 そして、この 18 non habet unda deos について、130–131 οὐδ' ὑμῖν ποταμός περ εὐρροος ἀργυροδίνης | ἀρκέσει  
 ... を踏まえてさらにニュアンスを出すならば、「イーリアスの世界では、供犠まで行った河の神ですら  
 救ってはくれなかったのだから、まして、(詩人のペルソーナの属する) 我々の世界では、何ら関わりの

そして、この、嵐と海の非情を語るにあたり「金か命か」の瀬戸際が問題とされる、という文脈は、例えば、*A.P.* 7.652.1-4 Ἠχέεσσα θάλασσα, τί τὸν Τιμάρεος οὕτως | πλώοντ' οὐ πολλῇ νηὶ Τελευταγόρην | ἄγρια χειμήνασα καταπρηνώσαο πόντῳ | σὺν φόρτῳ, λάβρον κῦμ' ἐπιχευαμένη; 286.3-5 τὰ δ' ὄλβια κείνα μέλαθρα | φρούδα (...) πάσης ἐλπίς ὄλωλε Τύρου, | οὐδέ τί σε κτεάνων ἐρρύσατο にも通底するのであり、とりわけ、Orlebeke が第 8 行と第 9 行の間で脱落した内容の根拠とした後者は、この点において妥当なものであると思われる。

以上を踏まえ、*Prop.* 3.7.7-18 は、*A.P.* 7 のエピグラムを組み合わせ引用するにあたって、その背景にさらに *Hom. Il.* 21.122-135 を踏まえているのであり、これが、プロペルティウスの叙述の骨格を成していた、と、そして、こうした事情から、第 8 行と第 9 行の間に lacuna が想定されはするものの、この 7-18 は大がかりな詩行の入れ替えの対象とすべきではなく、ひとまず、伝承をそのまま維持すべきである、と考えるのである。

そして、1-8 についてその連続性は疑われていないのであるから、私は、1-18 まではおよそ伝承を維持すべきである、と考えるのである\*21。

(東京大学)

## 参考文献

- Baehrens, E. ed., *Sex. Propertii Elegiarum Libri IV* (Teubner; Lipsiae 1880).  
 Butler, H. E. and Barber, E. A. ed., *The Elegies of Propertius* (Oxford 1933).  
 Camps, W. A. ed., *Propertius: Elegies Book III* (Cambridge 1966).  
 Enk, P. J. ed., *Sex. Propertii Elegiarum Liber Secundus*, 2 vols. (Leiden 1962).  
 Fedeli, P. ed., *Sextus Propertius: Elegeiarum Libri IV* (Teubner; Stuttgart 1984).  
 Goold, G. P. ed., *Propertius: Elegies* (Loeb CL; Cambridge, Massachusetts and London 1990).  
 Gow, A. S. F. and Page, D. L. ed., *The Greek Anthology, The Garland of Philip and Some Contemporary Epigrams*, 2 vols. (Cambridge 1968).  
 Gow, A. S. F. and Page, D. L. ed., *The Greek Anthology, Hellenistic Epigrams*, 2 vols. (Cambridge 1965).  
 Heyworth, S. J., *Cynthia* (Oxford 2007).  
 Heyworth, S. J. ed., *Sexti Properti Elegos* (OCT; Oxford 2007).

ない海の神々が救ってくれようはずもない」というかたちで、嵐と海の神の語るべき非情をさらに際立たせることができるであろう。

\*21 本稿は、2015年10月17日に成城大学で行われた第14回フィロロギカ研究集会での発表に基づき、加筆修正を行ったものである。研究集会で司会を担当して下さった大芝芳弘先生をはじめ、貴重なご質問・ご意見を下さった方々、そして、本稿作成にあたって様々な助言を下さった匿名査読委員の方々に感謝を申し上げたい。

- Heyworth, S. J. and Morwood, J. H. W. ed., *A Commentary on Propertius Book 3* (Oxford 2011).
- Hosius, C. ed., *Sex. Propertii Elegiarum Libri IV* (Teubner; Lipsiae 1922).
- Hubbard, M., *Propertius* (New York 1975).
- Kuinoel, C. T. ed., *Sexti Aurelii Propertii Opera Omnia* (London 1822).
- Monro, D. B. and Allen, T. W. ed., *Homeri Opera*, Tomus II (OCT; Oxford 1920).
- Morsley, K., 'Propertius 3.7', *CQ* 25 (1975) 315-318.
- Orlebeke, A., 'Propertius 3.7. 1-12', *CQ* 46 (1996) 416-428.
- Paley, F. A. ed., *Sex. Aurelii Propertii Carmina* (London 1872).
- Richardson, L. ed., *Propertius: Elegies I-IV* (Norman and Oklahoma 1976).
- Richardson, N., *The Iliad: A Commentary* Vol. VI (Cambridge 1993).
- Robertson, F., 'Lament for Paetus—Propertius 3.7', *TAPhA* 100 (1969) 377-386.
- Rothstein, M., ed., *Propertius Sextus: Elegien* (Dublin and Zürich 1966).
- Segal, C., *The Theme of the Mutilation of the Corpse in the Iliad* (Leiden 1971).
- Shackleton Bailey, D. R., *Propertiana* (Cambridge 1956).